

## 清末民初における『レ・ミゼラブル』の移入と日本 ： 陳景韓訳「哀史之一節逸犯」を例として

梁, 艶  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/24636>

---

出版情報 : *Comparatio*. 15, pp.14-30, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 清末民初における『レ・ミゼラブル』の移入と日本

—陳景韓訳「之類逸犯」を例として—

はじめに

梁 艶

中国におけるヴィクトル・ユゴー（一八〇二—一八八五）の移入は一九〇〇年代に遡ることができる。一九〇二年十二月、ユゴーの写真と紹介は日本に亡命した梁啓超が横浜で創刊した雑誌『新小説』第一号第二号に掲載されて以来、非凡な影響力を示し、その後、ユゴーの作品が次々と中国に移入された。ユゴーの代表作『レ・ミゼラブル』が最初に中国語に訳されるのもこの時期だった。数量を統計してみれば、清末民初（一八九八—一九一九）における『レ・ミゼラブル』の漢訳は管見の限り、七篇がある。それぞれは、蘇曼殊の翻案小説「惨社会」（『国民日報』、一九〇三年十月八日—十二月三日。一九〇四年、「惨世界」と改名され、鏡今書局より単行本として出版された）を先駆けに、周作人訳「天鵝兒」（『女子世界』第二年第四、五期の合併号、一九〇五年）、商務印書館編訳所によって訳された『孤星淚』（商務印書館、一九〇七年。単行本で上下二冊ある）、秋水訳「奇囚」（『神州日報』、一九〇七年四月十四日—五月五日）、陳景韓訳「之類逸犯」（『時報』、一九〇七年八月十六日—九月四日）、解吾訳「天民淚」（『娛閑錄』二十二期、一九一五年六月）と孝宗訳「怪客」（『小説時報』第二十八号、一九一六年）である。

清末民初におけるユゴーの移入は中国人日本留学生と深い関わりを持ち、明治期日本におけるユゴー・ブームから多大な影響を与えたということが、これまでの研究では、しばしば指摘されている（注1）。従って、ユゴー作品の漢訳を検討する場合、日本經由というルートは等閑できないと思われる。しかし、『レ・ミゼラブル』の漢訳について、従来の研究は殆ど蘇曼殊訳『惨世界』に集中しており、他の訳本については、『レ・ミゼラブル』の漢訳であることが認識されている段階にとどまっている。ゆえに、『レ・ミゼラブル』はいったいどういうふうな日本を經由して中国に移入されたかはまだ明らかになっていない。清末民初における漢訳『レ・ミゼラブル』の日本ルートを究明するには、上述した訳文の底本を考察することは有効な手段ではないだろうか。なぜなら、底本の考察は『レ・ミゼラブル』の受容史を研究する上で不可欠な基本作業であり、その上、底本が日本語訳であること自体は日本から影響を受けた有力な裏付けである。

本稿では、これまであまり注目を集めてこなかった陳景韓訳「之類逸犯」を対象を絞り、底本を考察することによって、その日本經由のルートを明らかにしたい。これを以て、清末民初における『レ・ミゼラブル』の移入と日本との関わりをより一層明白に示してみたいことを目的とする。

### 一 清末民初における『レ・ミゼラブル』の移入と日本

中国におけるユゴーの移入について、最初から日本という媒介

を抜きにしては語れないと思われる。樽本照雄の調査によると、ユゴーに言及した最初の中国語の文章は梁啓超が徳富蘇峰の「インスピレーション」(『国民之友』第二十二号、一八八八年五月)に基づいて訳した「烟士披里純 (INSPIRATION)」(『清議報』第九十九冊、一九〇一年十二月一日)である(注2)。その以降、早い時期にユゴーの翻訳に着手した人は殆ど梁啓超のように日本と何らかの関わりを持っている。

例えば、最初にユゴーの詩(「茶余隨筆」所収の「菲律賓之愛國者」『新民叢報』第二十七号、一九〇三年三月十二日)を漢訳した馬君武(一八八一〜一九四〇)は一九〇一年冬から一九〇六年夏にかけて日本に留学していた。彼は横浜で梁啓超と知り合い、ユゴーの翻訳・紹介を始めたのも梁啓超から影響を受けたためだと言われている(注3)。『俠奴血』(一九〇五年、小説林総發行所。原作は *Bug-Jargal*, 1826)と「鉄窗紅涙記」(『月月小説』一年一号〜二年六期(十八号)。原作は *Le Dernier jour d'un condamné*, 1829)の訳者包天笑(一八七六〜一九七三)は日本に留学したことがないとはいえず、日本語を独学し、友人を通じて日本で出版された本をたびたび入手し、特に森田思軒の翻訳に親しんでいる。「鉄窗紅涙記」の底本も森田思軒訳「死刑前の六時間」(一八九六年八月〜一八九七年二月、『国民之友』。一八九八年民友社『ユゴー小品』所収)である。「噫有情」(『小説時報』七〜九期。原作は *Les Travailleurs de la mer*, 1866)の訳者狄葆賢(一八七三〜一九四一)は戊戌変法(一八九八)期間中梁啓超と付き合い、政変後日本に逃亡し、一九〇〇年に帰国した。「噫有情」という訳題は黒岩涙香の

『レ・ミゼラブル』の翻案小説『噫無情』に倣ってつけられたと指摘されている(注4)。さらに、フランス語原文から精力的にユゴー作品を翻訳した曾孟樸でさえ、『九十三年』(『時報』一九一二年四月十三日〜六月十四日。単行本は一九一三年十月有正書局により刊行される)の翻訳に当たって、日本語訳を参照して注をつけたらしい(注5)。

ユゴーの漢訳と深い関係のある日本人といえば、先に触れた徳富蘇峰、森田思軒、黒岩涙香が挙げられる。この三人はいずれも日本におけるユゴー翻訳の功労者である。明治二十年代、徳富蘇峰を中心とする民友社刊行の総合雑誌『国民之友』は、ユゴー作品の全体に見配りをし、ユゴー作品を日本で普及することに重要な役割を果たした。ただし、蘇峰に文才を高く評価された森田思軒がいなければ、こうした功績はあげられるはずがないと言わなければならない。

「明治の翻訳王」と称された森田思軒(一八六一〜一八九七)は精力的にユゴーの作品を翻訳し、ユゴーの人道主義や社会思想をも評価していた。彼が訳したユゴーの作品はあわせて五編で、初出はすべて『国民之友』である。具体的に挙げると、「随見録」(『国民之友』第二十二号〜第三十二号、明治二十一年五月十八日〜十月十九日)をはじめ、「探偵ユーベル」(『国民之友』第三十七号附録〜第四十三号、明治二十二年一月一日〜三月二日)、「クラウド」(『国民之友』第六十九号〜第七十三号、明治二十三年一月三日〜二月十三日)、「懐旧」(『国民之友』第四百四十二号附録〜第四百七十号、明治二十五年一月十三日〜明治二十五年十月二十三日)

と「死刑前の六時間」(『国民之友』第三〇九号附録第三三五号、明治二十九年八月十五日) 明治三十年二月十三日) である。そのうち、「クラウド」(ユゴーの原作は *Claude Guenz*) と「死刑前の六時間」(ユゴーの原作は *Le Dernier jour d'un condamné*) は『レ・ミゼラブル』の先駆的な小説で、それぞれの主人公はジャン・ヴァルジャンのモデルである。思軒は早くから『レ・ミゼラブル』を愛読し、『レ・ミゼラブル』に深い関心を寄せ、ユゴー作品翻訳の序文や注釈の中で、たびたび『レ・ミゼラブル』(思軒は「哀史」と訳す) に触れている。彼は、四十才になつたら『レ・ミゼラブル』の翻訳に手をつけたいと身近な人に漏らしたが、夢は叶わず、三十六才で若死にした。にもかかわらず、ユゴーの人道主義や社会思想から導き出した「社会の罪」という思軒独自の思想は、当時の若い文学者たちに強い影響を与えた。

思軒の弟子にあたる原抱一庵(一八六六〜一九〇四)はその中の一人である。彼は社会小説の傑作『闇中政治家』を書いたのみならず、ユゴー『レ・ミゼラブル』の一部も抄訳した。すなわち、「ジャンバルジアン」(『国民新聞』明治二十五年五月八日) 八月二十八日)、「哀史の片鱗」(『自由新聞』明治二十六年一月十五日) 二月二日)、「ABC組合」(『少年園』第百四十五号) 第百五十六号、明治二十七年十一月三日) 明治二十八年四月十八日。明治三十五年二月に内外出版協会より単行本として出版された)、「曉鐘」(『太陽』第二卷第七号、明治二十九年四月五日)、「水・冥篇」(『文芸倶楽部』第二卷第九編、明治二十九年七月二十五日) である。

思軒の死後、彼の晩年の知己である黒岩涙香(一八六二〜一九二〇) がその遺志を受け継ぎ、思軒手沢の英訳本から『レ・ミゼラブル』を訳出し、『噫無情』と題して明治三十五(一九〇二)年十月八日から明治三十六(一九〇三)年八月二十二日にかけて『萬朝報』に連載する。これが爆発的な人気を博したために、『萬朝報』の発行部数が倍増しただけでなく、明治三十九(一九〇六)年には扶桑堂より単行本(二冊で、前編は一月に刊行、後編は二月に刊行)も出された。この訳業は、明治期におけるユゴー作品の翻訳が絶頂期を迎えたことを象徴的に表わし、明治・大正・昭和を通じての不朽の名作となつた。

魯迅訳「哀塵」(『浙江潮』第五期、一九〇三年六月十五日) はまさに日本でのこういうユゴー・ブームに乗って登場して来たといふ。工藤貴正は指摘している(注6)。いうまでもなく、魯迅(一八八一〜一九三六) は一九〇二年四月から一九〇九年八月にかけて日本に留学し、日本との関係が非常に深かった。涙香訳『噫無情』の連載中も、その単行本が出される際も、魯迅はちょうど日本に留学していた。しかし、「哀塵」の底本に使用されたのは涙香訳ではなく、「周密文体」の完成者といわれる森田思軒の日本語訳「随見録——ファンティーン Fantine のもと(千八百四十一年)」である(注7)。そして、魯迅は「哀塵」の「附記」において、思軒の日本語訳題「哀史」をそのまま借用して、ユゴーの代表作『レ・ミゼラブル』に言及している(注8)。これはまた中国における『レ・ミゼラブル』に触れた最初の文章だと言われている。魯迅は後に森田思軒訳『懷旧』も購入している。いつごろから定着し

たかをつきとめるのは難しいが、中国において『レ・ミゼラブル』が長い間「哀史」という訳名で広く知られていたことは確実である(注9)。

蘇曼殊の翻案小説「惨社会」も黒岩涙香訳『噫無情』がもたらしたユゴー・ブームに促されて誕生したものと考えられる。蘇曼殊は一九〇二年早稲田大学に留学し、一九〇三年「拒俄義勇隊」へ参加のため、九月に帰国を強いられた。同年十月八日から十二月三日にかけて、「惨社会」を『国民日報』に連載していた。これは半分創作半分翻訳の小説でありながら、『レ・ミゼラブル』の最初の中国語訳となっている。「惨社会」は後に「惨世界」と改名され、一九〇四年に鏡今書局より単行本として出版された。当時、この蘇曼殊訳は広範に読まれ、一般の読者に大きな反響を呼んだだけでなく、魯迅と周作人兄弟までその影響を受けてユゴー作品の愛読者となった(注10)。「惨社会」を皮切りに、『レ・ミゼラブル』は次から次へと中国語に翻訳される。清末民初(一八九八〜一九一九)における『レ・ミゼラブル』の漢訳は全部で七種類で、『惨世界』以外にもう一種類の単行本がある。これは商務印書館編訳所によって訳された『孤星淚』(一九〇七年、商務印書館。上下二冊、全部で五十回)である。残った五種類はいずれも断片的なもので、新聞雑誌に掲載されているものである。

『孤星淚』は豪傑訳とはいえ、小説の筋立てが全部残っており、『レ・ミゼラブル』の中国語のダイジェスト版と言える。『孤星淚』が当時の読者に深い感銘を与えたことは『小説林』や『小説月報』に寄せられた文章から読み取ることができる(注11)。

その底本は確定されていないが、当時の商務印書館が日本の金港堂と合併していることから推測すると、この訳も日本と関わっているのではないか。しかし、訳文の中に西洋文が残されているため、日本語訳を使用して翻訳に当たったとは想像しがたい。

一九〇五年の『女子世界』第二年第四、五期の合併号に周作人訳「天鵝兒」が載せられた。これは、ファンテーヌがパリを離れる前にコゼットを飲食店のテルナデイエ夫婦のところに預ける内容である。周作人は当時まだ日本語を解さないにもかかわらず、魯迅を通して日本のユゴー翻訳状況をきちんと把握していたらしい(注12)。周作人は「魯迅与清末文壇」において、魯迅が彼のためにアメリカで出版された八冊本の英語訳ユゴー選集を買ってくれたと語っている(注13)。もしかすると、「天鵝兒」の翻訳に使われた底本もアメリカ版ユゴー選集かもしれない。

一九〇七年四月二日に『神州日報』が創刊されてまもなく、四月十四日から秋水訳「奇囚」を連載しはじめ、五月五日に第二十二回訳載後、未完のまま幕切れを迎えた。中国における『神州日報』を調査した結果、残念ながら、現在では「奇囚」の第十八回(五月一日)〜第二十二回(五月五日)しか入手できない。この五回を読んでもみると、注目に値するのは、第二十二回では「ファンテーヌ」は「華姑娘」と、「コゼット」は「小雪」と訳されていることである。これはどうしても黒岩涙香訳『噫無情』を思い出さずにはおかない。『噫無情』では、主要登場人物について、涙香は音の要素と人物設定を巧みに案配し、読者に親しみやすい漢字に置き換えている。例えば、「ファンテーヌ」を「華子」、

「コゼット」を「小雪」、「ジャン・ヴァルジャン」を「戎瓦戎」、「ジャヴェール」を「蛇兵太」と訳している。この「華姑娘」と「小雪」の訳し方は涙香訳「華子」と「小雪」を彷彿させるのではないだろうか。「奇囚」の第十八回と第二十二回の内容を『噫無情』に照合してみれば、『噫無情』の「(十五) 蛇兵太」、「(十六) 星部父老」、「(十七) 死でも此御恩は」に相当する。資料不足のため速断は慎みたいが、秋水が「奇囚」の翻訳に際して『噫無情』を参照した可能性は否定できないと思う。

一九〇七年八月十六日から九月四日にかけて、陳景韓は秋瑾事件に触発され、「<sup>英訳</sup>逸犯」という題でマドレーヌ市長が様々な困難を克服して自首し、無辜なジャンマティユーを救う部分の内容を訳出し、『時報』に連載した。日本留学の経験を持ち、日本語が堪能な彼には日本語訳に基づいて重訳した欧米作品が数多くある。こうした背景を鑑みるに、「<sup>英訳</sup>逸犯」の底本は日本語訳である可能性が非常に高い。これについて、次節で詳述したいと思う。さらに、一九一五年六月、『娯閑録』二十二期に載せられた解吾訳「天民涙」はミリエル司教に関する内容であり、一九一六年『小説時報』第二十八号に掲載されている孝宗訳「怪客」は、マドレーヌ市長がコゼットをテルナディエ夫婦のところから請け出す内容である。解吾訳「天民涙」と孝宗訳「怪客」について、殆ど資料が見つけられていないため、日本と関係があるかどうか、現在のところには明らかでない。今後の課題となっている。

## 二 陳景韓のユゴー翻訳と日本

上述してきたように、清末民初における『レ・ミゼラブル』の漢訳は多かれ少なかれ日本と関わっている。陳景韓訳「<sup>英訳</sup>逸犯」も例外なく、日本と深い関係を持っている。「<sup>英訳</sup>逸犯」はどういうふうに関係付けているかを究明するには、まず、訳者の陳景韓について紹介しなければならない。

陳景韓（一八七八〜一九六五）は江蘇松江（現在上海に属している）の出身で、近代中国における著名なジャーナリストであり、小説家かつ翻訳家である。一八九九年暮から一九〇二年（注14）にかけて日本に留学し、東京専門学校（早稲田大学の前身）で文学を専攻していた。早稲田大学の文学部といえは、文芸雑誌『早稲田文学』の揺籃の地に当たり、坪内逍遙、島村抱月などの多くの文学者がそこに集まっていた。こうした環境の下で、陳景韓は日本語を身につけただけでなく、日本文壇の動向も把握していたと推測できる。帰国後、『大陸報』、『時報』、『申報』の主筆を歴任し、『新新小説』、『月月小説』、『小説時報』などの編集にも参与していた彼は、ジャーナリストとして活躍していた一方、小説の創作と翻訳にも非常に力を入れていた。陳景韓は明治二十年代から三十年代にかけて日本の文壇で重要な役割を果たした森田思軒、黒岩涙香、原抱一庵らの訳作を下敷きに数多くの欧米小説の翻訳に手を染めたと指摘されている（注15）。これも日本留学の経験が彼の文学活動に大きく寄与したことの証明だと考えられる。

陳景韓はまた森田思軒、原抱一庵、黒岩涙香と同様、ユゴー翻訳の熱心者である。彼は一九〇三年に『遊皮』、『偵探譚』の第一冊、時中書局、一九〇三年）を訳出し、一九〇七年にユゴーの『レ・

ミゼラブル』の部分訳である「<sup>三三</sup>逸犯」を『時報』に連載する。のみならず、彼は『ノートル・ダム・ド・パリ』(Notre-Dame de Paris, 1831)の翻訳にも手をつけ、その部分訳である「<sup>三三</sup>裁判」『小説時報』第四期、一九一〇年)と「<sup>三三</sup>売解女兒」(『小説時報』第九期、一九一一年)を発表するに至った。この二つの訳は断片的なものとはいえ、『ノートル・ダム・ド・パリ』の最初の中国語訳である。そういう意味では、陳景韓は清末民初におけるユゴー漢訳の先駆者であると言える。ちなみに、陳景韓訳『遊皮』の底本は森田思軒訳「探偵ユーベル」であると指摘されている(注16)。日本におけるユゴーの翻訳の実態を知る上で、陳景韓自身が日本留学中に蓄積した知識は重要であったが、周りの人のユゴー翻訳も陳景韓に重要な情報源を提供したと考えられる。森田思軒訳を下敷きに、ユゴーの『死刑囚最後の日』を翻訳した包天笑は陳景韓の親友であり、同じく『時報』の主筆である。この二人はお互いに文筆活動の重要なパートナーであり、『時報』や『小説時報』の編集などに常に協力し合う。また、黒岩涙香訳『噫無情』から影響を受けた狄葆賢は『時報』の社長にいたり、陳景韓と深い関わりを持っていたことはいままでもない。そのため、仮に陳景韓が森田思軒や黒岩涙香のユゴー翻訳に親しまなかったとしても、包天笑や狄葆賢から知ることができたと考えられる。したがって、「<sup>三三</sup>逸犯」の翻訳を検討する際、日本からの影響、特に森田思軒、原抱一庵及び黒岩涙香からの影響が看過できないと思われる。

### 三 「<sup>三三</sup>逸犯」の底本の考察

#### (一) 可能性のある日本語訳

実は、「<sup>三三</sup>逸犯」の訳文には日本語的要素が見られる。例えば、「彼」、「田舎」、「果物」というような単語は明らかに日本語のままである。すでに述べてきたように、陳景韓のユゴー翻訳は明治期日本におけるユゴー翻訳と切っても切れない関係である。もしかすると、「<sup>三三</sup>逸犯」の底本は日本語訳であるかもしれない。ならば、その底本はいったい誰の訳であろうか。

「<sup>三三</sup>逸犯」の底本を確定するために、まず内容の重なる日本語訳を選び出す必要がある。明治期における『レ・ミゼラブル』の日本語訳を確認した結果、「<sup>三三</sup>逸犯」の内容と重なるものは二つしかない。そして、この二つの訳はいずれも陳景韓が愛読し評価していた翻訳者の訳業である。すなわち、原抱一庵の翻案「<sup>三三</sup>曉鐘」と黒岩涙香訳『噫無情』である。

物語からみれば、「<sup>三三</sup>逸犯」の梗概は「<sup>三三</sup>曉鐘」とほぼ同様であるのに対して、『噫無情』の(ごく一部分(十四)斑井の父老(二十三)運命の網(後半)(二十四)本統の戎瓦戎が(廿五)不思議な次第(二十六)難場の中の難場(二十七)永久の火(二十八)天國の悪魔、地獄の天人(二十九)運命の手(三十)聞けば兒守歌である(三十一)重懲役終身に(三十二)合議室(三十三)傍聴席一(三十四)傍聴席二(三十五)傍聴席三(三十六)傍聴席四(三十七)傍聴席五)に相当する。

また、小説の人物名に注目すれば、「<sup>三三</sup>逸犯」に登場する「馬十郎」は、「<sup>三三</sup>曉鐘」では「チャブマソ」と記されるが、『噫無情』では同じく「馬十郎」という名前である。これは陳景韓が黒岩涙

香訳『噫無情』を参照した最も重要な証拠だと考えられる。さらに、「<sup>其定</sup>逸犯」では「ジャヴェール」を「甲必丹」、「ジャン・ヴァルジャン」を「(野猫子) 金鉢兒」、「マドレーヌ」を「麦多」と訳している。これらの人物の訳名はいかにも『神州日報』連載の「奇囚」を彷彿させる。「奇囚」において、上記の登場人物はそれぞれ「甲必大」、「金鉢兒」、「麦迭」という訳名である。一つの仮説を立ててみれば、陳景韓は「<sup>其定</sup>逸犯」を翻訳する際、「奇囚」を意識していたと思われる。『神州日報』は一九〇七年四月二日に上海で創刊され、紙面と欄の設置は『時報』に倣ったところが多いと言われている。当時『時報』の主筆を務めていた陳景韓は、新聞界の動向を常に関心を持ち、『神州日報』の誕生及び『神州日報』に最初に掲載された翻訳小説「<sup>其定</sup>逸犯」に注目することもありうるであろう。「奇囚」の底本は『噫無情』である可能性があるということを思い合わせれば、当時の中国では『噫無情』が入手できたということも想像できる。「<sup>其定</sup>逸犯」の底本が『噫無情』である可能性はかなり高いと考えられる。しかし、これはあくまでも推測にすぎない。その底本を確定するには、さらに「<sup>其定</sup>逸犯」を「晝鐘」と、そして『噫無情』と詳しく比較する必要がある。

## (二) 底本の推定

以下では、「人名・地名の比較」及び「プロットの比較」を通して、「<sup>其定</sup>逸犯」の底本を考察してみようと思う。比較するまえに、まず、使用されるテキストについて説明しておきたい。「<sup>其定</sup>逸犯」と「晝鐘」は初出したものを利用するが、『噫無情』は一九〇六年

に出版された単行本を用いる。なぜなら、一九〇二年十月から一九〇三年八月にかけて連載されていた『噫無情』は保存することも、蒐集することも難しく、底本とされる可能性がひくい。帰国後も常に日本の文学界に関心を寄せ、情報をいち早く獲得できる立場にあった(注17) 陳景韓にとって、むしろ、一九〇六年に刊行されたばかりの単行本『噫無情』のほうが入手しやすかったと思われる。従って、ここでは敢えて一九〇六年の単行本『噫無情』を取り上げる。ただし、紙幅の関係で、比較する際、原文を引用せず、内容を要約して説明するにとどめる場合もある。

- 【逸】 陳景韓訳「<sup>其定</sup>逸犯」(『時報』一九〇七年八月十六日〜九月四日)  
 【晝】 原抱一庵訳「晝鐘」(『太陽』第二卷第七号、一八九六年四月)  
 【噫】 黒岩涙香訳『噫無情』(扶桑堂、一九〇六年)

### (1) 人名・地名の比較

- |               |              |                |
|---------------|--------------|----------------|
| 【逸】 甲必丹       | 【晝】 チヤベル     | 【噫】 蛇兵太        |
| 【逸】 麥多        | 【晝】 マデライン    | 【噫】 斑井         |
| 【逸】 馬十郎       | 【晝】 チヤブマン    | 【噫】 馬十郎        |
| 【逸】 (野猫子) 金鉢兒 | 【晝】 ジャンバルジャン | 【噫】 戎瓦戎        |
| 【逸】 尼爾得       | 【晝】 *なし      | 【噫】 仙ニルドー      |
| 【逸】 谷希培       | 【晝】 *なし      | 【噫】 古シエベル      |
| 【逸】 白波馬車行     | 【晝】 *なし      | 【噫】 バループと云ふ馬車屋 |
| 【逸】 蒙都市       | 【晝】 m—市      | 【噫】 モントリウル     |
| 【逸】 愛琴驛       | 【晝】 ヘスデンの一旅亭 | 【噫】 ヘスデンと云ふ驛   |

【逸】葛羅溪 【曉】エーリー、ル、ホー 【噫】クロチエ

\*分析 人名を検討してみれば、「曉鐘」には、「エリス」で登場する証人「尼爾得」と「谷希培」に当たる人物は存在しない。

麦多市長が彼らと顔を突き合わせる場面もない。一方、『噫無情』ではこの二人に相当する人物が登場する。地名かれみれば、「エリス」の「白波馬車行」と『噫無情』の「バループと云ふ馬車屋」が似ているのに対して、「曉鐘」には馬車屋に相当する場所がない。その上、「蒙都市」の訳し方も恐らく「曉鐘」の「エリス」から来たものとは思われない。また、「エリス」の中の「愛琴驛」の「驛」は日本語のまま、それも『噫無情』の訳を参照した証拠だと思われる。さらに、「エリス」にある「葛羅溪」という地名の中国語の発音は『噫無情』の「クロチエ」の発音に近く、「曉鐘」の「エーリー、ル、ホー」に関係づけることは難しい。

## (2) プロットの比較

### ①市長の来歴

【逸】且説、法國東西部蒙都市。夙為有名商埠、地産珠玉飾物、凡英徳等國婦女所用諸品、類能仿造、市面甚形繁盛。自後所出原料漸少、市面亦因而漸衰。至一千八百十五年、忽来一遠方客民、始營橡皮業、人甚勤懇、所出品物亦佳、遠近之人購者漸多。始僅設一小廠、後乃漸漸擴充至成一極大工場、蒙都市商業中推為巨擘、蒙都市之繁盛、亦頓復舊觀。自客民来蒙都市五六年後、市中之民深得信用、屢願舉彼為市長、彼均辭不就。自後聲聞漸

廣、所營之業益形發達、且宅心仁厚、諸凡慈善事業、無不盡力扶持。因之、巴黎政府聞之、准市民之請、特命授彼為蒙都市市長。再辭不獲、乃以客民之資格、一躍而據市長之位。市中之民間之、莫不欣愛。市長姓麥名多、年近五十、沈默寡言、立身嚴正。自為市長後、不改常度。以故不第市內之人心誠悅服、即鄰近村市亦無不同聲欣羨。(八月十六日)

(さて、フランス東西部の蒙都市は、早くから有名な開港場であり、珠玉の飾り物を産出する土地である。凡そ英国や独逸などで婦人が使った諸物は、すべて模倣作できるから、市況は甚だ繁盛していた。後に産出する原料が次第に減つてきたため、市況も次第に衰えた。千八百十五年に至り、突然遠方から一人の旅人がやつてきて、ゴム製造業を経営し始めたが、非常に勤勉かつ誠実で、製品も良いため、遠方からも近辺からも買いにくる者が次第に増えてきた。初めは、一つ小さな工場を設けただけだったが、後に次第に拡大して極めて大きい工場になり、蒙都市商業界の中でも大手に数えられるようになり、蒙都市の繁盛もにわかに以前の様子を取り戻した。この旅人が蒙都市に来て五、六年後、市民は彼を深く信用し、たびたび彼を市長に推挙したが、彼は尽く辞して就かなかつた。その後、名声は次第に広がり、営む会社も益々発展していき、更には思いやりがあつて心が寛大で、あらゆる慈善事業に尽力して援助しないことはない。そのため、パリ政府がこれを聞きつけ、市民の請願をいれて、特別に任命して彼に蒙都市市長の座を授けた。再び辞するも許されず、旅人の資格で、一躍して市長の地位に昇つたの

である。市民はこのことを聞くと、みな欣喜雀躍した。市長は姓は麦、名は多、年は五十近く、寡黙で事を処することが厳正である。市長に就任してからも、いつもの態度は変わらなかつた。ゆえに、蒙都市の人々が心から承服しているのみならず、近くの村や町でさえ羨ましく思わない者はなかつた。(拙訳、以下同様)

【曉】\*相当する内容はない。

【噫】小雪の郷里モントリウルと云ふは、昔から英國産や獨逸産の珠玉や鋳物を摸作し、婦人の、装飾用として諸方へ積出す土地であるが、近來原料の直が騰貴した為め、自然商賣が衰へて、土地總躰に殆ど見る影も無い迄に疲弊して居た。所が、千八百十五年(戎瓦戎が僧正の家に宿つた年)の暮に何者とも知れぬ旅人が来て、木の脂や護謨などを以て其品を製造する事を初めた、誠に容易な改良では有るけれど、原料も安く、手間も少く、其上に出来揚りが見事なので、一時に聲價を高くして、寂れた町が纔の間に回復し土地總躰に、昔に幾倍する繁昌を来した、眞に工業的の革命が行はれたと云ふ者だ。(中略)彼れの年は五十左右と見受けられた、氣質は至て柔和で有る。(中略)地方廳から、彼れの功績を中央政府へ上申した、彼れは國王から土地の市長に任命せられた、けれど彼れは辭した。(中略)愈よ出て愈よ現はれるのは彼れの徳だ、終に市會が全會一致で彼れを市長に推選した、國王から再び其の任命が来た、彼れは又も之を辭した、けれど今度は地方廳が、其の辭表を取次がぬ、市中の重なる者は、或は自身で、或は總体を立て、毎日の様に彼れ

の許へ、就職の勸告に来た(中略)彼れは終に就職した、善を行ひ功徳を積むと云ふ考へで就職したのだ、斑井父老と呼ばれた身が終に斑井市長と尊はるゝ事に成た。(五五〇五八頁)

\*分析 「<sup>其</sup>噫」の冒頭では麦多市長の來歴について紹介する。しかしこの内容は「<sup>其</sup>曉鐘」にはない。一方、「<sup>其</sup>噫無情」では三頁くらいを費やしてこのことについて述べている。「<sup>其</sup>噫無情」の冒頭の内容はすべて「<sup>其</sup>噫無情」に見出せる。しかし、簡略したもので、むしろ『噫無情』のその要約と言える。

②前科者を見破つた証拠

【逸】大凡多年監禁的人、步履必然和平常人不同。多年監禁必然是個兇犯、兇犯必然常想越獄。官吏恐他越獄、必然常用重鐐其雙足。雙足受鐐既久、步履自然有異。現在下官細視市長步履之間、卻和會受重鐐的囚犯相同、因此又生一重疑惑。

(八月十六日)

(おおよそ長い年月収監された人は歩き方が必ず普通の人と違う。長い年月収監されるといふのは必ず兇悪な犯人である。兇悪な犯人は必ず常に脱獄しようとする。官吏は彼の脱獄を恐れ、必ず常に彼の両足に重い足かせをかける。久しく足かせをかけられてみると、歩き方は自然と異様なものとなる。今私は市長殿の歩き方を細かく見るに、それはかつて重い足かせをかけられていた囚人と同じだ。そのため、より一層疑いを深めた。)

【曉】\*相当する内容はない。

【噫】第一貴方の歩み振が何だか足を引擦る様に見えるのです、是は牢の中に長く居て、足へ重い分銅を着けられて居た人の歩

み振だと私は此様に思ひました、御存じの通り、重い懲役人の中で、危険な奴と認められた者は足へ分銅を着けられるのです。分銅を着けられて長く居る間には、足の癖が違て異様な歩み方をする様に成り、人に依ると生涯其癖が抜けません、貴方の歩み振には何だか其様に見える所が有りますので扱は長く懲役に居た事の有る大變な前科者だと思ひました。(九二頁)

\*分析 市長の歩き方について、『噫無情』では非常に詳しく描かれている。しかし、筆者は『レ・ミゼラブル』のフランス語原文を確認したが、その中には「*votre jambe qui traine un peu*」(注18)という短い文しかない。このような相違はいつたいどのようにして生まれたのか。これを究明するには、まず黒岩涙香が利用した英語底本における市長の歩き方に関する描写を確認しておかなければならない。涙香が『噫無情』の翻訳に当たって、森田思軒の手沢の英語訳『レ・ミゼラブル』を底本として使用したことは明らかであるが、いつたいどんな英語訳かは不明である。当時、森田思軒と原抱一庵、そして黒岩涙香との関係が非常に深く、原抱一庵が訳したウージェーヌ・シユーの『巴黎の秘密』の自序によると「思軒居士在世の砌り、居士は訳を涙香小史に授めき、然れども、涙香辞して訳せず、翻つて余に勧めぬ、余、訳を敢てせり云々」とあり、訳本について互いに相談することがあつたらしい。従つて、『レ・ミゼラブル』の翻訳に手を染めた抱一庵が使用した英語底本は涙香と同じく森田思軒の手沢本である可能性がたかい。筆者はかつて原抱一庵が「ジャンバルジャン」を翻訳する際に参照した底本につい

て考察したが、これは Charles E. Wilbour の英訳であると確定した(注19)。従つて、森田思軒の手沢本は Charles E. Wilbour の英訳であるかもしれない。無論、確定するまでにはまだ考証が必要であるが、本稿では涙香訳の独自性を比較検討するために、一応 Charles E. Wilbour の英訳を参照物として取り上げたいと考えている。

Charles E. Wilbour の英訳を見ると、その中にも「*your leg which drags a little*」(注20)という一文しかない。こつういふことを考慮すれば、市長の歩き方についての描写はおそらく黒岩涙香が独自の想像を發揮して書きくわえたものであろう。「芝居逸犯」にせよ、『噫無情』にせよ、市長を前科者と判断する証拠として、市長の歩き方があげられている。しかし、「晝鐘」にも歩き方についての描写は見当たらない。そういう意味で、陳景韓は涙香独自の訳文を参照したと言わざるを得ない。相似した例をもう一つ挙げてみたい。フランス語原文と Charles E. Wilbour の英訳ではジャンマティユーという人物は一人娘を持っている。しかし、『噫無情』では、馬十郎(ジャンマティユーに相当する人物)は「獨身の老人」である。一方、「晝鐘」ではこのことについて一切触れていない。「芝居逸犯」に登場する馬十郎は「無家無室」であるから、『噫無情』に一致していることは明らかである。『噫無情』には涙香独自の内容はまだまだある。以下比較しながら、述べていきたい。

### ③ 市長がジャヴエールと握手する場面

【逸】市長無語、便伸手跟他告別。甲必丹也伸手、受市長執時、

覺得市長的手宛如冰的一般、十分寒冷。(傍線——筆者、以下同様) (市長は何も言わず、手を差し出して彼と別れを告げる。甲必丹も手を差し出した。市長に握られたとき、市長の手が氷のようにとても冷たいと感じた。)(八月十八日)

【曉】 久しからずして余は遽かに起ち「今日余は切迫の用務累なり居れり。何れ御身がアールスより歸りたる後ち緩々相見るべし、サ」斯く云ひて握手せんため手をさし出すに、渠は退却して「閣下。余の免黜を」(中略) 此時余は再び手を差出せるが渠は竟に受けざりき。(一〇三頁)

【噫】 市長は又異様に考へつゝ、「では熟考して置きませう」と云て丁寧に手を差延べた、けれど蛇兵太は之を握らぬ「私は最う市長と握手する資格が無いのです」(中略) 彼れ若し市長の手を握つたならば、殆んど死人の手の様に冷いに驚いたゞらう(九八頁)

\*分析 握手の場面について、フランス語原文では「Et il lui tendit la main Javert recula」(注21)となっている。Charles E. Wilbourの英訳では「And he held out his hand to him. Javert started back」(注22)になっている。つまり、両訳ともジャヴェールは市長の手を握らなかつた。このことは『噫無情』でも、「曉鐘」でも同様である。しかし、『噫無情』にはやはりフランス語原文、Charles E. Wilbourの英訳、そして原抱一庵訳と違つところがあつた。それは市長の手の温度に関する描写である。手の温度についての描写は他の訳にないため、これも涙香の創作だ考えられる。「<sup>本</sup>噫無情」では『噫無情』と異なるが、甲必丹(ジャヴェ

ールに相当する人物)は市長の手を握つた。それにもかかわらず、最後は市長の手の冷たさを強調しているゆえに、『噫無情』を参照した証拠であるのは疑えないだろう。

#### ④ 市長が昔の物を焼き捨てる場面

【逸】 忙又立起身来、走至房後、将一扇平時不開の門開了。走進門去、那門内卻是一間密室。室内一無別物、只有一付囚衣囚帽、另外還有一張犯罪的罪書。市長一見這幾件東西、不覺登時打了幾個寒噤。呆看了半晌、說道、金鉢兒、金鉢兒、你還認得這幾個老同伴否。這是你前幾年時時刻刻和你相處的、你如今又要和他来往了、你好細細認着。說罷便伸手取了那囚衣罪書來。細細翻了一翻、又咨嗟了一回、便拿回房內。依舊將這房後的門關了、取了些炭火、放在火鉢裏。將火來煽大了、然後將這囚衣罪書都投入鉢內。看他燒毀已畢、然後走出房去。(八月二十一日)

(彼は急いで立ち上がると、建物の後ろに行き、普段は開いていない一枚の戸を開いた。中に入って行くと、戸の後ろは一間の密室であつた。室内には他のものは一切なく、ただ囚人用の服と帽子がひとそろいと、そのほかに一枚の犯罪証明書が置いてあるだけだつた。市長はこれらのものを見ると、思わずにぶるつと身震いをした。呆然として長い間見つめたあげく、言つた。「金鉢兒、金鉢兒、お前はまだこれらの旧友を覚えてゐるか。それは以前何年間か常にお前と行動を共にした者だ。お前は今までこれらと付き合うことになつたから、ちゃんと覚えておくんだぞ」と。言い終わると手を伸ばしてその囚人用の服と犯罪証明書を取り上げた。何度も引っくり返してよく見た後に、ま

ため息をついて、部屋の中へ持つて帰った。もともとおりにその部屋の後ろの戸を閉めると、少し炭を取って暖爐の中にくべた。煽いで暖爐の火を強くし、囚人用の服と犯罪証明書を書き暖爐の中に投げ込んだ。すっかり焼き尽くされたのを見て、それから部屋を出ていった。

【晝】 \*相当する内容はない。

【噫】 又も立て小抽斗の所に行き、小さい鍵を取出て壁の隅に在る秘密の推入の戸を開た。此中には彼れが昔の記念として、彼の出獄の時に着て居た戎瓦戎の着物と杖と帽子と革の袋とを納つて有る。之が有つては戎瓦戎と云ふ事を思ひ出す種だから、先づ之を焼捨ねば成らぬ。彼れは此品々を押入の中なる箱の底から取上げた。取上げて能く見ると、流石に今昔の感に堪へ兼てか、我れ知らず身が震ふた。けれど彼れは最う怯まぬ。見る其の目先に、又何か轉がツて落た物が有る、是れは銀貨だ。(中略) 今度は暖爐の火を眺めた、此品々を焼捨するには充分の火が焼て居る。けれど何だか氣が後れる、何うも焼く程の勇氣が出にくい。彼れは三度室の中を見廻した、室には彼れの此振舞を見張て居る物が有る、其れは彌里耳僧正から與られた彼の銀の燭臺で有る。若し彼れをして到底其の昔を忘れ得ざらしむる者が有るとすれば、其れは昔し着た着物や帽子などでは無く、此の燭臺なんだ。彼れ此の燭臺に照されて、何うして今思ふて居る様な事が出来やう『ア、先づ此燭臺を鑄潰して只の地銀の塊に仕て了はねば可けぬ』と彼れは呟き、今まで取上げて居た着物を放し、燭臺の許に歩き寄つた。爾して先づ一個を取り、其

の尖の一端を以て、暖爐の火を突き起した。(二〇七頁)

\*分析 「晝鐘」では市長が昔の物を焼き捨てる場面がないため、これについて陳景韓が「晝鐘」を参照した可能性はないと思われる。しかし、これは陳景韓独自の創作ともいえない。なぜなら『噫無情』にも類似した場面が存在しているからだ。しかし、両者の間には異なる箇所もある。『噫無情』では焼きつぶしたものは昔の服、杖、帽子などではなく、彌里耳僧からもらった銀の燭台である。それに対して、「晝鐘逸犯」では市長は昔の囚人用の服と犯罪証明書を焼き捨てる。なぜこういう違いが存在するのか。原因は「晝鐘逸犯」が『レ・ミゼラブル』の部分訳であることにある。陳景韓は小説前後の繋がり配慮し、この部分の物語の完全性を保つために、わざとジャン・ヴァルジャンとミリエル司教の話、子どもの銀貨を奪う話、そしてフアンティ―ヌやコゼットの話を削ってしまったのである。銀の燭台や金貨が出るはずがない故、陳景韓は『噫無情』を参照しながら焼き捨てたものを書き換えたと思像できる。

#### ⑤名刺について

【逸】 警察兵道、倘然是個有職位的人、那問官背後還有三個特別位置空在那裏、客人如要去時、可交我一紙名片、我好去通報。市長點了點頭、退下樓去。下時便一步步想、究竟要他通報不要。到了樓下、決意向身邊取出一紙名片來、又取了一枝鉛筆、向名片上寫了幾個字、又忙上樓將那名片交於警察兵。(八月二十九日) (警吏は言った。「もし地位のある人であれば、裁判官の背後に、まだ三つの特別席が空けてありますので、お客様がお望みなら、

私に名刺を一枚渡してくだされば、すぐに取り次ぎに参ります」と。市長は軽く頷き、階段を下りていった。一段一段と下りながら彼は考えた。いったい彼に取り次いでもらうべきかどうか。階下に至ると、意を決して、名刺を一枚取り出し、鉛筆を取って、名刺の上に何文字か書き付けるや、急いで階上まで引き返してその名刺を警吏に手渡した。

【曉】折から一個の使丁の彼方より来りて余の傍を過ぎんとしてければ、余は之を呼び抑め「傍聴席は満員なりや」

渠「半席も」

余「官吏席は」

渠「判事の背後に只だ」席明き居れり」

斯く云ひて渠は去らんとしければ。

余「オ、これを判事まで」

余はポツケツトより手早くm―市々長の肩書ある一葉の名刺を取出して渠に渡し「傍聴を得たき旨を首坐判事に通じ呉れよ」

(一一八―一九頁)

【噫】警吏は又云ふた「お待ち成さいよ。裁判官の席の背後に、特別席が三個だけ空て居ます、けれど是は公職を持た人の為に、裁判官が殊更ら取除けて有るのでから。官吏で無い人は仕方が無いのです」(中略)警吏は此人が甚く屈托して居る状を見て「官名を肩書にした名刺を裁判官に送れば多分入れて呉れませうけれど」誰かの名刺でも貰つて来いとの意味が分かる、けれど市長は其意味を悟り得ぬのか、充分には聞取らぬ振で茲を去つた。爾して悄悄と本来た廊下へ引返し、階段を下り初めた。

(中略) 彼れは一段下りては考へ、考へては又下り、終に階段の中程へ来た、茲から降る道が左右二筋に分れて居る、彼れは右にも左にも降り得ぬ、暫く欄干に凭れて、前額に手を當てたが、前額には脂が漲つて居る、彼れは静に紙入を取出した、其の中から名刺を出した。爾して其の表面へ鉛筆で何やら認めた、何うしても彼れは立去り得ぬのだ、裁判官に名刺を送つて、特別席に入れて貰ふ氣に成たのだ。此名刺を以て再び彼れは警吏の前に引返しした。(一二七―一二八頁)

\*分析 「之謂逸犯」でも『噫無情』でも、特別席が三つあいて居る。しかし、「曉鐘」では一つしかあいていない。「之謂逸犯」において、市長が名刺を渡すきつかけは警察兵の推薦である。『噫無情』においてもそうである。しかし、「曉鐘」では推薦や紹介など一切してくれなかつたにもかかわらず、市長自ら積極的に名刺を渡すのである。そして、「之謂逸犯」と『噫無情』のこの部分の内容を比較してみれば、『噫無情』は「之謂逸犯」より詳しいことがわかる。つまり、「之謂逸犯」のそれは創作でなく、『噫無情』の要約であることが窺える。

#### ⑥ 法廷の光景

【逸】只見對面正中間、有兩個警兵、夾住一個人立着。

(八月三〇日) (正面の真ん中に、二人の警察兵に挟まれて、一人の人が立っているのが見えた。)

【曉】\*相当する内容はない。

【噫】横木の前に、右左から二個の憲兵に夾まれて一人の男が立って居る。(一二三頁)

\*分析 「曉鐘」では法廷の光景について何も書かれていない。

それに対して、「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」も『噫無情』も詳しく描かれている。

フランス語原文と Charles E. Willbour の英訳では犯人が坐っている。それに対して、引用文が示しているように、『噫無情』においても「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」においても、犯人は立っているのだ。そのため、この場面も陳景韓が涙香訳を参照した証拠になる。

### ⑦裁判の場面

【逸】\*馬十郎の供述（八月三十一日）、証人の証言（九月一日）、市長の自首（九月二日）、市長と証人とを突き合わせる場面（九月三日～四日）。

【曉】\*「曉鐘」には裁判の場面がない。最後に、市長の自白について一言述べられ、すぐに文章が終わっている。

【噫】\*裁判の場面は非常に詳しく描かれる。馬十郎の供述から、証人の証言、市長の自首及び証人と突き合せの場面に至るまで全て揃っている。そして、その描写は「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」よりずっと詳しい。（一三五～一五〇頁）

\*分析 「曉鐘」は原抱一庵自身が語っていた通り、「これは『哀史』某處の脚色を藉りて余が恣まゝに作為せる小説なり。決して之を譯すと云はず」とされるものである。従って、『レ・ミゼラブル』の原文にある裁判の場面が削られたのも唐突ではない。一方、「曉鐘」にないこの部分の内容は「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」にあり、そして、すべて『噫無情』の中に求めることができる。そのうえ、『噫無情』は「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」よりずっと詳しい。陳景韓はおそらく『噫無情』を参照しながら、筋立てだけを抄訳しただろう。

以上の比較を通して、陳景韓は「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」を翻訳した際に、参照したのは原抱一庵訳「曉鐘」ではなく、黒岩涙香訳「噫無情」であると推定できる。ただし、前述したように、陳景韓が常に原抱一庵に関心を寄せ、彼の作品を数多く翻訳したことからみれば、陳景韓は「曉鐘」を目にした可能性は排除できないだろう。そして、上記の引用文からも窺えるように、「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」は『噫無情』に忠実に翻訳されたのではなく、むしろ、『噫無情』における「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」に相当する内容の粗筋として翻訳されたものと言えよう。

### 結び——『レ・ミゼラブル』の移入に表われる中国意識

以上みてきたように、「<sup>三</sup>曉鐘逸犯」の翻訳は確かに『噫無情』から影響を受けた。しかし、陳景韓は翻訳に際して、『噫無情』をそのまま受動的に受けとめるのではなく、中国の現状を考慮しながら、個人的理念や目的に合わせて自分なりのものに変身させた。このことは、まず訳題の角書に表われている読者意識から窺える。『噫無情』を底本として利用したにもかかわらず、『レ・ミゼラブル』のことを「噫無情」と訳せず、当時の大衆に広く知られた定訳「哀史」にしている。この題名が読者の注意を引き付けたか、読者に親しみを感じさせたかどうかは分らないが、一応読者を強く意識していたことが想像できる。また、陳景韓は訳者附記において「我譯此文、非偶然也。蓋以愧彼、恐禍及己、殺友滅口之卑怯小人也（私がこの文章を訳したのは偶然ではない。災いが自分に及ぶのを恐れ、友人を殺して口止めをするというような卑怯な

やからを恥じさせることを旨とする」とという翻訳動機を示している。『噫無情』を全部訳出するのではなく、市長が無辜な馬十郎を救出した部分だけを翻訳したとこと、翻訳動機と照合してみれば、陳景韓が重視しているのは『レ・ミゼラブル』の文学性ではなく、その小説が民衆の啓蒙に利用できる点である。

このように常に中国社会を意識した『レ・ミゼラブル』の漢訳はまだある。例えば、蘇曼殊訳『慘世界』は中国の政治、社会、人物を風刺した翻案と評されている。また、周作人は「天鵝兒」の附記において「これはパリの秘密である（此巴黎之秘密）が、中国では日常茶飯事である（此中國之常事）」と感歎している。こうした附記からは訳者の啓蒙意識がかなり読み取れる。これも「小説は啓蒙機能を有する道具である」という当時の一般的な小説観を背景に据えている。

しかし、この点こそ『噫無情』の翻訳と異なっている。日本におけるユゴー受容は、最初は極めて政治色の濃いものであったが、明治二十年代に入って、蘇峰を中心とする『国民之友』一派、つまり森田思軒や原抱一庵らのユゴー受容は文学と政治の両面におたつた。この時期に、『レ・ミゼラブル』の高い文学価値が認められた。明治三十年代になると、政治的傾向が弱まり、もっぱらユゴーの文学的側面が衆目を集めるに至る。『噫無情』がその集大成である。『レ・ミゼラブル』は日本という媒介を経由して中国に移入されたとき、その文学価値は日本において既に重視されるようになっていた。それにもかかわらず、『レ・ミゼラブル』は中国への移入に伴い、日本と異なる受容様相を呈した。こうした受容様

相の究明も、『レ・ミゼラブル』の移入にかかわる重要な課題であるが、紙幅の関係で、別稿に譲りたい。

〔付記〕 本稿における引用文は、文意を損なわないかぎり、旧字体を新字体に改め、ルビを省略する等の改変を適宜加えている。なお、本稿は二〇一〇年度日本比較文学会春季九州大会（於・柳川市立図書館、七月三日）の口頭発表に基づき、加筆・修正を施したものである。

#### 注

〔注1〕このような指摘は下記の著書や論文に見られる。郷振環「名著名訳『悲惨世界』的中訳本」、『影響中国近代社會的一百種譯作』对外翻訳出版公司、一九九六年）、韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究（一八九七—一九一六）』（中国社会科学出版社、二〇〇八年）、工藤貴正『魯迅の翻訳研究（4）——外国文学の受容と思想形成への影響、そして展開——日本留学時期（『哀塵』）——』、『大阪教育大学紀要・第一部門』第四十一卷第二号、一九九三年二月）。

〔注2〕樽本照雄「ユゴーの漢訳名譽俄について（下）」、『清末小説から』98、二〇一〇年七月一日）。

〔注3〕陳春香「馬君武的 foreign literature translation and its impact on Japan」、『広西大学学报（哲学社会科学版）』第二十九卷第三期、二〇〇七年六月）。

〔注4〕前掲『清末民初漢訳法国文学研究（一八九七—一九一六）』、

八七頁。

(注5) 樽本照雄「曾孟樸の初期翻訳(下)」『清末小説』(第三十四号、二〇一一年十二月一日)、八九頁。

(注6) 前掲工藤貴正氏の論文、七八頁。(注1) 参照。

(注7) 同右。

(注8) 具体的な文章をあげれば、下記の通りである。「作者常于諾鐵耳譚發其一、于哀史表其二、令于此示其三云。芳梯者、哀史中之一人(作者は嘗てノートルダムに於いて第一者を發し、哀史に於いて第二者を表わし、今この書に於いて第一三者を示す。ファンティーンは哀史の中の一人である)」。魯迅以外に、周作人は『孤兒記(小説林社、一九〇六年)の「凡例」において『レ・ミゼラブル』に言及した時「哀史」という訳題を使っている。一九二七年、穆儒丐が『噫無情』を底本として『レ・ミゼラブル』を翻訳した際にも、

「社会哀史」(『盛京時報』一九二七年三月九日)一九二八年二月二十一日)という訳題にしている。さらに、一九三五年に茅盾は「雨果和『哀史』」(『中学生』一九三五年第五十三、五十四期)という文章を発表し、一九五二年に「為什麼我們喜愛雨果的作品」(『文芸報』一九五二年四期)という文章においても引き続き「哀史」という訳題にしている。

(注10) 周作人は「關於魯迅之二」(周啓明『魯迅的青年時代』中國青年出版社、一九五七年三月、一二七頁)において、「こ

一時囂俄成爲我們的愛讀書(蘇曼殊が上海の新聞に『慘世界』を記載したので、一時ユゴー(の作品)は私達の愛読書になった)」。徐念慈は「小説管窺錄・孤兒記」(『小説林』第一卷、一九〇七年)一九〇八年)において「讀至此、未有不下淚者。實近數月中不經見之名作也(こまで読んで、涙をこぼさない者はいない。確かに最近數カ月あまり見られない名作である)」と評価している。惲生は「小説叢話」(『小説月報』第二卷第三期、一九一一年)において、「囂俄氏善作悲哀文字、是書尤沈痛不忍讀。余讀是書、三舍三讀、未終篇也(ユゴー氏は悲しい文章を作るのが得意で、此の書は殊に沈痛で読んでいられない。余は此の書を読んで、三度止め、三度読んだが、全篇を読みおわっていない)」と語っている。

(注12) 工藤貴正「周作人『孤兒記』の周縁——ヴィクトル・ユゴーの受容を巡る魯迅との関係より」(『学大國文』四十号、一九九七年二月)参照。

(注13) 前掲『魯迅的青年時代』七八頁。(注10) 参照。

(注14) 陳景韓の日本留学について、これまで詳細に研究されていないため、具体的な帰国期日は不明である。

(注15) 李艷麗「冷血の作品における日本の可能性——“写情退治”から論じる」、二〇〇九年十一月二十二日。

(注16) 樽本照雄「ユゴーの漢訳名囂俄について(上)」(『清末小

説から』97、二〇一〇年四月一日）参照。

(注17) 陳景韓は原抱一庵の翻訳を称賛し、帰国後も原抱一庵の状況に注意を払っていた。一九〇四年八月二十三日に逝去後、陳景韓はまもなく同年十月に刊行された『新新小説』第一年第二号から抱一庵の『巴黎之秘密』を訳載し始める。そして、その序文において、「惜主人已於西曆八月罹病逝世。自後不得復睹佳作、以供讀者。是則余之不幸、抑亦讀者之不幸也(惜しいことに、主人は既に新曆の八月に病気に罹って世を去った。今後二度と彼の佳作は見る事が出来ないため、読者に供するものもなくなる。これは私の不幸であるが、そもそも読者の不幸でもある。)」と述べ、哀悼の意を表している。こういうことを鑑みるに、陳景韓は当時中国に帰国しているにもかかわらず、日本の文学界の情報をいち早く獲得できる立場にあったと考えられる。

(注18) Victor Hugo, *Les misérables*, pt. I, *Famine*, Edition Ollendorf, 1862, p.275.

(注19) 原抱一庵が使用した底本について、拙稿「原抱一庵訳『シヤンバルシアン』の底本について」(『Comparatio』第十四号、二〇一〇年十二月)参照。

(注20) Victor Hugo, *Les misérables*(translated from the original French, by Chas. E. Willbour), New York: Carleton, Publisher, 413 Broadway(late RUDD&CARLETON), 1864, p.119.

(注21) 前掲書、p.283。(注18)参照。

(注22) 前掲書、p.122。(注20)参照。